

千曲川・犀川のすがた

千曲川は信濃川（全長 367km）の上・中流域にあたります。その源を甲武信岳（2,475m）に発し、佐久・上田・長野・飯山の各盆地を形成しながら長野県を北に流れ、新潟県に入ってから信濃川と名を変えて日本海に注ぎます。源流から新潟県境までの長さは

214km です。流域面積は 7,163km² で、長野県の面積の約 53% を占めています。多くの支川を合わせ、水量は豊かです。

支川の犀川は、北アルプスの槍ヶ岳（3,180m）を源とし、上流部は梓川と呼ばれます。松本盆地で奈良井川と合流して犀川となり、高瀬川と合流してから筑摩山地を横断し、長野盆地で千曲川に合流します。全長は 161km で、千曲川との合流点より上流の長さは、千曲川より 10km ほど長い川です。



千曲川の様子を地形から見ると、山地を流れる上流区間（佐久盆地付近より上流）に始まり、谷底平野や盆地が連続する区間（佐久盆地～長野盆地付近）、流れが緩やかで川幅の広い区間（長野盆地～飯山盆地付近）および峡谷部の区間（長野盆地～飯山盆地付近、飯山盆地～新潟県境）に分けられます。また犀川についても、梓川・奈良井川・高瀬川の各支川が山間部を流れる上流区間、これらの河川が合流する松本盆地の区間、筑摩山地の中を流れる峡谷部の区間（陸郷～小田切ダム付近）、そして長野盆地に入り千曲川に合流する扇状地の区間と続きます。



千曲川・犀川の鳥瞰図
（鳥の目から見た流域の様子）

千曲川・犀川の合流点付近（長野市）

上流部や峡谷部は両岸に山地が迫り、川の流れによって削られた岩盤が露出し、あるいは大きな角張った石が谷底を埋めています。上流部の川の流れは、小規模な滝と滝壺



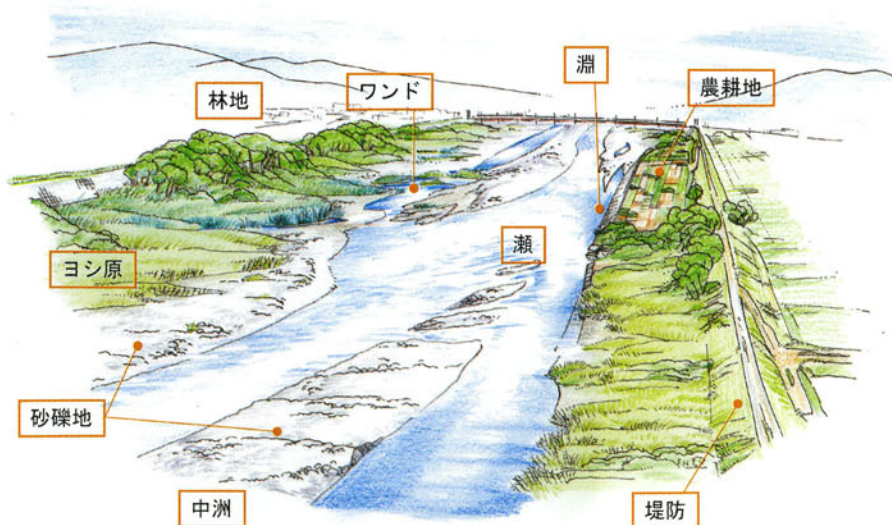
峡谷部を流れる千曲川（飯山市）

が連続し、あるいは早瀬と淵が連続するなど変化に富んでいます。この上流部には、小規模ながら河原の広い山間盆地が形成されている区間（川上村原、南牧村森下など）も見られます。

また峡谷部では、急峻な地形を利用してダムが設置され、ダム湖となっている所もあります（生坂村生坂ダム、野沢温泉村・飯山市西大滝ダムなど）。

中流から下流にかけては、いくつもの支流が合流し、川幅も広がって河原が発達します。一度洪水が起こると、川は流れを変え、土砂の堆積と侵食を行います。その結果、河川の中には瀬、

淵、中洲、砂礫地、草地、林地、湿地、ワンド・たまりなど、様々な河川環境が見られるようになります。これらの環境は、時間の経過とともに徐々に変化するほか、洪水のかく乱によって急激に変化します。



河川の中・下流域の環境

千曲川・犀川と人々との関わりは古く、遠く万葉の詩歌にも詠まれ、常に人々の身近にあって、人々の喜びや悲しみ、また願いなどを集め、地域固有の風土を醸してきました。その付き合いの様子は、流域内の各地に残る信仰、民俗伝承やセタ行事などとして、今も脈々と引き継がれています。

また、千曲川・犀川はたびたび大暴れしては多くの被害を与えてきました。特に、寛保2年（1742）の「戌の満水」、弘化4年（1847）の善光寺大地震の際の犀川大洪水では、今に語りつがれる大被害を生じ、多くの生命・財産が失われました。しかし、人々は度重なる水害に見舞われながらも水の流れと折り合いをつけながら、この地にたくましく根を張って暮らしてきました。



平野部を流れる千曲川（長野市）

現在、流域内の人口は約150万人で、これは長野県の総人口（215万人）の約70%にあたります。特に長野市付近や松本市付近など、川沿いの平坦地に人口が集中していますが、それは人々の生命を支える生活用水、農業用水、また流域の人々の生活を潤す工業用水などが豊富にあるためといえます。

しかし、社会経済の発展に伴い、水質の悪化や河川景観の人工化、大規模な利水・治水施設の設置による下流の水量減少などにより、川の姿は大きく変貌しました。飲み水が水道になり、千曲川の流れを利用した水運も鉄道や道路交通へと移り、堤防が整備されて水害も身近に感ずることがなくなりつつある現在、川と人との交流の記憶も日々遠くなりつつあるように思われます。

一方で、多様で心豊かな社会の形成に向けて、身近な自然としての川への関心も高まりつつあります。千曲川・犀川は、今後の地域社会の生活基盤として、また人々の生活に潤いを与える存在として、重要な役割を担っていくことが期待されています。